舞鶴市糸井文庫蔵『祝言浦島台』に見える
浦島伝説享受と恵比寿と河豚と「福」　付、翻刻

畑　恵里子

一　はじめに

本稿は、京都府北部に位置する舞鶴市糸井文庫蔵『祝言浦島台』を対象として、浦島伝説の享受史における本作品の特徴をごく簡易に整理したものである。本書の現在の所有者は舞鶴市、データベースは立命館大学アート・リサーチセンター（以下、ＡＲＣと表記する）による。

本書は浦島伝説の二次創作に相当すると考えられる。浦島、七福神のひとりである恵比寿、乙姫の侍女である河豚が主な登場人物となる。筋立てはおよそ以下のとおりである。

丹後国水江に浦島という漁師がいた。ある時、大きな亀がやってきて、「あなたがあまりにも美男であるため、龍宮の乙姫様があなたを見染めて、婿にしたいというので、龍宮へお連れするようにとの命令でやってきた。」と言った。そこで亀の背中に乗ると、宮島の弁天様のもとへ通う西宮の恵比寿様と、偶然、海上で出会った。龍宮を見たことのない恵比寿様は、一度見てみたいというので、浦島と共に赴くことになった。

豪華絢爛な龍宮には美女の乙姫がいた。浦島は喜ぶが、なんと、乙姫は心変わりをしてしまい、恵比寿を見つめて盃をとり、「夫となるのはこのおかた。」ともたれかかった。驚く浦島へ、乙姫の腰元の河豚が「乙姫様のかわりに自分を可愛がってくださいませ。」と、しなだれかかる。

龍宮の家老である海老爺がやってきて、玉手箱を浦島へ与えた。そして、「あなたはたいそうな美男だが、しょせん卑しき漁師にすぎない。一方、恵比寿様は、容貌はともかく、たいへんなお金持ちであるから、心変わりはしかたない。しかし、このまま帰すのもいかがかと思い、玉手箱を授けることとなった。この玉手箱には金持ちになるものが入れてある。」との旨、説明があった。

すごすごと龍宮から帰った浦島は、玉手箱を開けてみた。すると、潮騒河豚が一匹入っていた。落胆して河豚を放り出すと、それはお多福へと転じた。よく見ると、龍宮でしなだれかかってきた、あの河豚であった。二人は夫婦となった。働き者かつ貞節者の河豚のおかげで、浦島は長者となり、その上、九千歳も長生きをして、子孫も繁盛したという。めでたし、めでたし。

二　書誌情報

舞鶴市糸井文庫について簡易に触れておく（注一）。

本文庫は一九四九年より舞鶴市指定文化財とされている。糸井文庫には、京都府北部を舞台としている大江山・浦島・山椒（山庄）大夫などに関する、近世から明治期の資料が、集中的におさめられている。

舞鶴市糸井文庫の目録にあたる『丹後郷土資料館目録』では、『祝言浦島台』を黄表紙・合巻のカテゴリに位置づけていて、作者は十返舎一九、作画は五湖亭貞景、出版は山本栄久堂、文政一四年春板行と整理している（注二）。二〇二五年現在、糸井文庫は舞鶴市の管轄下にあるが、本来の所有者は糸井仙之助であり、本目録の作成者も同氏である（一八七四～一九四九年）。京都府与謝郡出身の実業家で、故郷である丹後にゆかりの古典籍を蒐集した。後に本文庫を舞鶴市が管理するようになったという。

ＡＲＣのデータベースである「舞鶴市糸井文庫閲覧システム」では、本書を黄表紙・合巻とする（注三）。草双紙の一つである黄表紙とは、文字通り黄色い表紙を持ち、一七七五（安永四）年から一八〇六（文化三）年頃を中心に隆盛した、しゃれや風刺に特徴を持つ大人向けの絵入りの本である。書名の読み方は「しゅうげんうらしまだい」としている。ＡＲＣでは、作は十返舎一九、画は歌川貞景、判型は中本（一七．七×一一．八センチ）、巻冊は一冊、刊行年は文政一四（一八三一）年、制作は山本屋平吉としている。なお、歌川貞景とは次のような人物である。（注四）。

江戸時代後期の浮世絵師。

文政―天保（てんぽう）（一八一八―四四）ごろの人。初代歌川国貞の門人。江戸目白台但馬（たじま）屋敷にすみ、国貞風の美人画を得意とした。二代貞景も、初代国貞の門人で、五湖亭の号をついだ。姓は小島。通称は庄五郎。作品に「四雅之内」「当世四季ノ詠」など。

本書について、本データベースの書誌情報では、さらに次のように説明している（注五）。

参考文献「浦島伝説の研究」林晃平では、浦島の祝言性を示すとされる（題名から）。「浦島九千歳のながいきし」（五ウ）とある。確かに、『祝言浦島台』からは祝祭性が色濃いことがうかがえる。とはいえ、それは本作品に限ったことではなく、近世の浦島享受の特徴のひとつととらえることができる。

三　浦島伝説と七福神との融合

近世の浦島享受では、浦島伝説の枠組だけが主に利用され、他の伝説などと融合する傾向にある。本作品も同様であり、その序文には「昔噺の猿、龍王宮に行き、生肝を取られんとせしを、偽り帰りしより、丹後水の江の浦嶋、また俵藤太秀郷、みな龍宮に至りし事、世に知る所なり」（一丁表）とある。

では、古代から続く浦島伝説のうち、何が取り上げられているのか。『祝言浦島台』では、浦島、亀、乙姫、玉手箱が登場している。

「波間より御身の男ぶり良きを見染め」（一丁裏）て浦島に恋をする乙姫は、古代の筋立てに合致している。浦島の容姿についても、乙姫の腰元の河豚からは「お前のやうな良い男」（三丁表）、家老の海老爺からは「男ぶりは大ていなれども」（三丁裏）と、同じような指摘をされている。浦島は「男ぶり」のよさが繰り返し周囲から賛美され

ているのだが、この点は、おおむね古代の浦島伝説の流れに沿っているといえよう。

しかし、浦島へ求婚していたはずの乙姫が、あっさりと資産家へ心変わりをしてしまう点は、大きな相違である。

また、亀と乙姫とについても相違する。古代では、亀は乙姫へと変じるため、両者は一体化している。だが、本作品ではそうではない。亀は龍宮城における家来のひとりであり、主君筋である乙姫とは、それぞれ別個の存在とされている。

玉手箱の中身も、古代とは相違する。入っているのは煙でも、雲でもない。中身は一匹の河豚、それは龍宮の乙姫の侍女、腰元である。この河豚は乙姫の代替となり、浦島の妻となる。そればかりではなく、この河豚は働き者で、浦島へ資産や子孫をもたらすという、いわば福の神のような存在となる。

こうした相違点こそ、本作品の持つ特徴のひとつとして指摘できよう。なお、本作品における「福」へのこだわりについては後述する。

さて、本作品において、浦島伝説と結びついているのは七福神である。現在でも、福徳を授ける神として信仰されているこれらの七つの福神のうち、登場するのは二名、恵比寿と弁天とである。

①西宮の恵比寿様、宮島の弁天様のかたへ通ひ給ふとて、鯛にうち乗り行き給ふ。海上にて浦島と道連れになり、龍宮へ行くと聞きて羨ましく、「我、話には聞き及べども、いまだ龍宮を見たることなし。何とぞ我も一見したし。」と浦島にうち連れて、道々話しながら、恵比寿様も龍宮へ赴き給ふ。　（一丁裏）

特に活躍するのは、縁起の良いめでたい魚とされている「鯛」をトレードマークとする恵比寿であり、名のみ登場するのは弁天である。弁天は安芸の宮島を拠点としていて、恵比寿の恋人という位置づけにある。

それにしても、七福神のうち、大黒天、布袋尊、毘沙門天などではなく、恵比寿神が浦島のライバル役として選ばれている理由とは何か。

おそらくそれは、浦島と同じく、海洋に由来する漁業を生業としているためである。それに、釣り竿を必携する漁師の浦島と同様、恵比寿も釣り竿を携えていることが多い。そして、トレードマークとなる魚介類がいることも、彼らの共通項となる。浦島には長寿で縁起のよい亀、恵比寿にはめでたい名を持つ鯛がつきものである。挿絵には、亀に乗る浦島が、「鯛にうち乗」る恵比寿と連れ立っている様子がえがかれている（一丁裏、二丁表）。

こうして、海洋、釣り竿、附随する魚介類などといった複数の共通項を持つこの二人は、「道連れ」「うち連れて」、共に龍宮へと向かう。なお、「西宮の恵比寿様」とあることから、この恵比寿とは、具体的には、現在も信仰されている兵庫県西宮市にある西宮神社の恵比寿と推測される。新春には「福男」が選出されるなど、「福」との関わりは深い。

三舟隆之は「江戸時代の浦島太郎物語には、乙姫との関係、竜宮城、玉手箱、長寿などのイメージをパロディー化したものが多い」と指摘しており、そのうちのひとつに『祝言浦島台』を挙げている（注六）。それに付け加えるならば、本作品は、祝祭性を色濃く打ち出している二次創作ということになろう。

近世の浦島享受は、古代や中世の内容をそのまま踏襲しているので

はない。確かに浦島は美男であるし、乙姫は浦島を見染めてもいるのだが、乙姫は早々に資産家の恵比寿に乗り換えているし、玉手箱には堅実な働き者の河豚がおさまっている。

このように、近世の浦島享受では、浦島伝説は換骨奪胎され、その枠組だけが活用される傾向にある。それだけ近世期には古典作品が浸透し、広く愛好されてきたということになる。

四　河豚と恵比寿とが浦島へもたらす「福」

近世の浦島享受では、祝賀の雰囲気が押し出される傾向にある。本作品もその流れを踏襲している。序文からそれは明示されている。

②今やその浦島の事跡を、滑稽にあやなし、ちょっくり小晒落にこの小冊を著し、当春の御年玉にと、ちゃらつかす事しかり。

（一丁表）

「当春」すなわち新春の、つまりは年の改まった新年の、「御年玉」にということが、作品の前提として示されている。このように祝賀用であることが当初よりうたわれている。

そして、先に確認したように、浦島と比較されるのが七福神、しかも海洋に由来する恵比寿という「福神」という設定は見逃せない。恵比寿は本作品で重要な役どころとなる。「さてさて、これは思ひがけもない。わしが女に惚れられたは、福神仲間へ聞こへても、外聞かたがた、このやうな嬉しいことはないが、気の毒なは浦島殿だ」（二丁裏）と恵比寿が述べているように、本作品には、浦島のライバルとして「福神」の設定がなされている。まして、恵比寿は、めでたいものの代表格のひとつとされている「鯛」を手にしているのであるから、祝賀の度合いは高い。序文に取り上げられている浦島伝説以外の作品、たとえば龍宮にゆかりのある猿の生き胆の話などと比較すると、浦島伝説の持つ祝祭性は高く、新春すなわち新年にふさわしいといえよう。そこには新年にふさわしく華やいだ雰囲気がちりばめられている。

後に、乙姫は、美男であっても経済的に不如意な浦島から、容姿に恵まれなくとも資産家で羽振りの良い恵比寿へと鞍替えをして、恵比寿を夫としてしまう。龍宮の家老の海老爺が、浦島へ経緯を説明するにあたり、次のように述べている。

③「その方、折角乙姫君をちょろまかさんとて、その小鼻にそりをうたせて来たりし所、あての槌がはづれて、さぞかし力落としなるべし。されどもそれは当たり前のことなり。なぜといふに、その方、男ぶりは大ていなれども卑しき漁師なり。そのしみたれなるふりして、いかにも銭のなさそうな風俗。恵比寿様、男ぶりはともあれ、七福神のお仲間にて大金持ちなり。さるにより、乙姫君にも貧乏人より金持ちが良いとのお好みゆへ、さてこそ、その方、小便せられたり。しかし、ただも帰されまいとの事にて、この玉手箱をその方へ下されたり。何一つ不足なき龍宮の姫君でさへ、今は男ぶりの良いより金持ちの方がとのたまふ世の中。とかく金を持つ者でなければ、おちは取れぬから、貴様も金を貯める算段をするがよい。この玉手箱には金持ちになるものが入れてあるから、早く持って帰らしゃれ。これはご大儀でござった。」と、ついと立って入りければ、後に浦島独り、「面白くもない。とんだ目にあった。」と、不承不承にかの箱を抱へて立帰る。

（三丁裏、四丁表）

浦島は「男ぶりは大ていなれども卑しき漁師」と断罪され、「そのしみたれなるふりして、いかにも銭のなさそうな風俗」と、金のない風貌を批判される。それに比較する形をとり、恵比寿への賛辞が「恵比寿様、男ぶりはともあれ、七福神のお仲間にて大金持ちなり」と始まる。

このように、容貌を示す「男ぶり」と経済面を示す「金」とが、明確に対比されている。

海老爺だけではない。何より、「貧乏人より金持ちが良い」という判断をしたのは乙姫自身である。これについても、海老爺は「何一つ不足なき龍宮の姫君でさへ、今は男ぶりの良いより金持ちの方がとのたまふ世の中」という時勢を説き、「とかく金を持つ者でなければ、おちは取れぬ」と浦島へ訓告している。

その後で登場する玉手箱へも、「金」がらみの説明がなされている。海老爺は、「貴様も金を貯める算段をするがよい。この玉手箱には金持ちになるものが入れてある」（四丁表）と述べており、後に浦島も、「此内には金持ちになるものを入れおきしと海老親父の言ひたるが」（四丁裏）と述懐している。

このように、「銭」「大金持ち」「金持ち」「金」が、この箇所には頻出しており、「今」の、当世の、すなわち近世特有の、貨幣経済の影響力の強さが露呈している。「金」を持つ裕福な資産家であればこそ評価の対象となるというわけである。

しかしながら、「金」「銭」がないと酷評されていた浦島も、その後、ついに資産家への道をたどることとなる。契機は贈与された玉手箱であり、その中に入っていた乙姫の侍女の河豚であった。河豚は浦島の妻となり、次第に多くの資産を浦島へもたらすこととなる。

④もてなしの面白さに、浦島、心浮かれて次第に睦まじく、この河豚、顔容貌は見にくけれども、心ざし優しく貞節者にて、夫大事と敬ひ、女の手わざにかしこく、糸取り、機織り、縫い針仕事、夜の目も寝ずに稼ぎ、世帯を倹約しければ、浦島だんだん金が出来て、少しのうちに人に金を貸すやうに、次第に増へて安楽の身となりける。これみな女房の働きより起こりしなれば、玉手箱に入れて龍宮より帰りし河豚こそ金になるものと、海老の言ひたるが今思ひ当たり、浦島も心の内に今までその身にあたはぬ欲心を恥ぢて、心を改め、身の分限を守りけるにぞ、いよいよ富貴繁盛の身の上となりける。兎角、人はその身に過ぎたることを願ふは強欲にて、その心濁れるなり。心濁ると澄めるとは雲泥の違ひにて、河豚といふも、濁る時は鰒毒とてその毒あり。又、澄める時は福徳となり幸ひとなる。浦島、今は心清く澄みたるゆへ、□□□の河豚毒、はや福徳となりて、さてこそ幸ひ来たりけるなり。

（五丁表）

その美貌が称賛されていた乙姫（二丁裏）とは対比的に、河豚は「顔容貌は見にく」かったという。しかし、「心ざし優しく貞節者にて、夫大事と敬ひ、女の手わざにかしこく、糸取り、機織り、縫い針仕事、夜の目も寝ずに稼ぎ、世帯を倹約し」たため、「浦島だんだん金が出来て」、蓄財に成功し、「人に金を貸すやうに」なるほどゆとりが生じて、「安楽の身」となることができたという。それらは全て、河豚の功績であり、「これみな女房の働きより起こりしなれば、玉手箱に入

れて龍宮より帰りし河豚こそ金になるもの」と、「金」をもたらす河豚への感謝が示される。

こうして経済的なゆとりが出て来た浦島は、過去を振り返り、「身」を内省し、それによって、一層富貴となってゆく。「浦島も心の内に今までその身にあたはぬ欲心を恥ぢて、心を改め、身の分限を守りけるにぞ、いよいよ富貴繁盛の身の上となりける」とあり、「身」につりあわぬ「欲心」「心」を見つめなおし、「身の分限」をわきまえるようになったがゆえに、「富貴繁盛の身の上」を獲得することに成功する。

それを踏まえて、教訓として、「濁る」「心」に対して「澄める」「心」の重要性が説かれている。「人はその身に過ぎたることを願ふは強欲にて、その心濁れるなり。心濁ると澄めるとは雲泥の違ひにて、河豚といふも、濁る時は鰒毒とてその毒あり。又、澄める時は福徳となり幸ひとなる。浦島、今は心清く澄みたるゆへ、□□□の河豚毒、はや福徳となりて、さてこそ幸ひ来たりけるなり」とあり、「心清く澄みたる」ようになった浦島は、「河豚毒」ではなく「福徳」「幸ひ」を獲得するようになる。多くの魚介類のうち、河豚が選ばれた背景のひとつに、「福」をもたらす「河豚」の縁起の良さがあるのであろう。しかし、河豚は「鰒毒」にもなる。すべては「心」がけが肝要であるという。

末尾に至り、祝祭はいよいよ高まり、大団円を迎える。

⑤浦島は女房を持ちてより、めきめきと身上を仕出し、今は漁師をやめて家倉を立派に建て、田畑あまた買ひ求め、女男を使ひ、寛闊の暮らし。この節、恵比寿様、龍宮より帰り給ひ、以前のこ

との言ひ訳に、浦島の方へ訪ね来たり給ひ、以前の代はりとて福徳を授け給ふゆへ、いよいよ浦島は金銀山のごとく次第に増へて、万福長者となり、その上、九千歳の長生きし子孫繁盛しけるとぞ。めでたしめでたし。

「心」だに正しき時は美目かたち醜きとても於多福の神」

当春御とし玉ものにかやうの小冊、いろいろ出板仕候間、御求め下さるべく候。　（五丁裏）

蓄財に成功したために「今は漁師をやめ」た浦島は、「家倉を立派に建て、田畑あまた買ひ求め、女男を使」えるように裕福となり、「寛闊の暮らし」を迎える。

その時、再び恵比寿が登場する。

龍宮から戻った恵比寿は、結果的に乙姫を横取りしてしまったことへの「言ひ訳」として、浦島へ「福徳を授け」た。そのために、浦島はますます「金銀山のごとく次第に増へて、万福長者となり、その上、九千歳の長生きし子孫繁盛」したという。経済、長寿、子孫繁栄と続き、万事、「めでたしめでたし」と繰り返されて、了となる。

改めて、末尾にて本作品は「当春御とし玉もの」にふさわしく調整されたものであると強調されている。締めくくりの和歌は、「心だに正しき時は美目かたち醜きとても於多福の神」とあり、「多福」の「神」を称賛している様子がうかがえる。

ここで留意しておきたいのは、本作品は、単純な拝金主義ではないという点である。引用④⑤で指摘されているのは「心」のありようで

ある。「心」「身」とのバランスを踏まえて、「心」が「正しき時」には「福」がやってくるという。なお、三舟隆之は「結婚は、愛だけでは成立しない。貧乏なイケメンより、不細工でも金持ちのほうが良い、というのはひとつの現実である。一方、どんな美人でも働き者でなくては、家庭はめちゃくちゃだ。そういう庶民の結婚の現実を浦島太郎の物語に重ね合わせたのは、見事というしかない」と指摘している（注七）。首肯されよう。加えて、本稿では、「福」を得るためには、何より「心」のありようこそ重視されるものであるということが、教訓として示されていることを指摘する。

五　おわりに

近世期に伝わる本作品の浦島伝説享受には、いくつかの特徴が見られる。

一つ目は、他の伝説や伝承等との融合である。本作品では七福神と結びつく。そのうち、浦島のライバルとして、浦島と同じく、海洋にゆかりがあり、釣り竿や鯛を携える恵比寿神が登場する。

二つ目は、祝賀の系譜である。本作品の序文からは、新年の読み物として扱われていることがうかがえる。恵比寿の他、登場するのは海老や河豚である。浦島は玉手箱からあらわれた河豚を娶る。その後、「心」を清くした浦島は「福」を得て、資産を増やし、子孫は繁栄し、長寿を得る。これらは末尾では「めでたし」と括られて、祝賀が繰り返されて終了することとなる。ここには、玉手箱を得て老残となる、あのあわれな浦島の姿はない。

以上、古代の浦島伝説からの変容を簡易に指摘した。

（注一）以下の書誌情報の体裁は、二〇一九年度～二〇二四年度『静岡英和学院紀要』に掲載されている複数の拙稿を踏襲している。

（注二）糸井仙之助編『丹後郷土資料目録』（舞鶴市、一九五七年）。

（注三）立命館大学アート・リサーチセンター「糸井文庫閲覧システム」（https://www.arc.ritsumei.ac.jp/archive01/theater/html/maiduru/index.html二〇二五年一一月一日閲覧）。

（注四）『日本人名大辞典』（講談社、二〇〇一年）。

（注五）（注三）前掲データベース。

（注六）三舟隆之『浦島太郎の日本史』（吉川弘文館、二〇〇九年）。

（注七）三舟隆之（注六）前掲書。

付、翻刻

『祝言浦島台』

凡例

一、舞鶴市糸井文庫蔵本を底本として翻字する。立命館大学アート・リサーチセンター「舞鶴市糸井文庫閲覧システム」の画像データを基本的に使用する。必要に応じて、糸井文庫象蔵本を直接確認する。https://www.dh-jac.net/db1/books/search_maiduru.php

一、かな遣いは原則として底本に拠り、適宜、濁点、句読点、半濁音、引用符、改行等を補う。

一、ひらがな表記を適宜漢字に改める。

一、漢字表記を適宜ひらがなに改める。

一、繰り返しを示す踊り字（〳〵、ゝなど）は、それぞれ、もとの字に置き換える。

一、促音や拗音は細字で記す。

一、漢字の字体や送りがなは、現代の一般的な用法に近づける。

一、底本にふりがながある場合、原則としてルビとして記す。

（表紙　裏）

十返舎一九作

五湖亭貞景画　　部数億兆

祝言浦島台　　全

文政十四年辛卯春新刻　よし町親仁橋角　山本栄久堂梓

（一丁表）

祝言浦島台序

日本記に、彦火々出見尊兄の鈎を失ひ海神の宮に至り、赤女の口をさぐりて、是を得たりといふ。海神の宮は龍宮なり。提婆品にも、文珠菩薩、龍宮に至りし事あり。昔嘶の猿、龍王宮に行き、生肝を取られんとせしを、偽り帰りしより、丹後水の江の浦嶋、また俵藤太秀郷、みな龍宮に至りし事、世に知る所なり。今やその浦島の事跡を、滑稽にあやなし、ちょっくり小晒落にこの小冊を著し、当春の御年玉にと、ちゃらつかす事しかり。

卯の春新板　　十返舎一九　誌■■

（一丁裏）（二丁表）

丹後国水江といふ所に浦島といふ者あり。浜辺に出でて釣りをなしゐたる所へ、大きなる亀、海上に浮かみ出で、この亀、人の物言ふごとく、浦島に向かひて言ふやう、「我は龍宮の者なり。龍王の姫君、乙

姫と言ふが、今日、はからず、波間より御身の男ぶり良きを見染め給ひ、「わがつまにせん、いざなひきたるべし。」と我へ仰せつけられたれば、これよりすぐに龍宮へ連れ申さん。」と言ふ。浦島聞きて、「幸ひ我は独り者なり。さだめて、その乙姫、美しからん。望む所。」と、亀の背中へうち乗れば、亀はそのまま泳ぎ出して行く所に、西宮の恵比寿様、宮島の弁天様のかたへ通ひ給ふとて、鯛にうち乗り行き給ふ。海上にて浦島と道連れになり、龍宮へ行くと聞きて羨ましく、「我、話には聞き及べども、いまだ龍宮を見たることなし。何とぞ我も一見したし。」と浦島にうち連れて、道々話しながら、恵比寿様も龍宮へ赴き給ふ。

浦島、「わしは、龍宮の乙姫といふ美しい娘に惚れられて、婿になりに行くのだから、わしと一所にござると、お前も大切にとりはやされて、馳走にあひなさるであらうから、ゆるりと逗留なされて、私が乙姫と睦まじい所を御覧〔じ〕てお帰りなさりませ。」

恵比寿、「これは難儀な人と道連れになった。さっきから貴様の垂れ話をうけていると、甚だ難渋だ。俺も弁天といふ色事があるから、俺もそれを話して聞かさうか。」

（二丁裏）（三丁表）

浦島、海上にて恵比寿様と道連れになり、同道して龍宮に至りけるに、あまたの鱗の出向かひ、奥殿にいざなふにぞ、その殿中の結構さ、金銀珠玉をもって作りたてたる朱の欄干、玉の擬宝珠、ギヤマンの御簾の内に音楽聞こへ、なまめきたる声して、この館の姫君、乙姫といふが、あまたの宮女にかしづかれ、その姿、綾錦の装束、緋の袴、頭には珊瑚琥珀の玉のかんざし、瓔珞を下げて、器量はもとより、色は雪のごとく、その美しさ、透き通るばかり。浦島は見るより心有頂天となり、この代物を我が物にすることかと口なめづりをしていたるが、乙姫はいかが心変はりせしや、浦島のかたへは目もやらず、恵比寿様の顔に見とれて、余念なき体に、やがて盃出づると、乙姫、盃を取り、一つ飲みて恵比寿様へさし、「これからわがつまはこのおかたなり。」ともたれかかるに、浦島は肝を潰し、「さても粗相千万、それは婿の門違ひならん。」と言ふに、乙姫、かぶりをうち振りながら恵比寿様の手を取りて、さも嬉しそふに「こなたへ来たり給へ。」とてうち連れ、ついと立ちて御簾の内へ入りければ、後に浦島もっけな顔して呆れゐるに、乙姫の腰元、河豚が膨れた顔して浦島のそばへ寄り、「婿様が間違ひて、さぞかし御心がすみますまい。お前のやうな良い男をどうしてお嫌ひなされたやら。これも縁づくなれば仕方がないと諦めて、どうぞ乙姫様の代はりに、これから私を可愛がって下さりませ。」と、浦島へしなだれかかりて口説きける。

「さてさて、これは思ひがけもない。わしが女に惚れられたは、福神仲間へ聞こへても、外聞かたがた、このやうな嬉しいことはないが、気の毒なは浦島殿だ。折角ここの婿になる気で来たものを、いらざるわしを連れてきたばっかりで、こんな目にあはれた。酒でも飲んでもう帰って下さい。御大義でござった。又、重ねてこんな口があったら

頼みます。」

「今日は、何としてこんな目にあふやら。廂を貸して母屋を取られ、銀の代はりに鉛とは。どふした拍子の瓢箪で押さへたは、鯰のやうな河豚の横飛び。ハテ馬鹿らしい目にあふた□□。」

（三丁裏）（四丁表）

暫くして、龍宮の御家老、海老爺様いできたり。浦島を呼び寄せ、一つの箱を与へて申けるは、「その方、折角乙姫君をちょろまかさんとて、その小鼻にそりをうたせて来たりし所、あての槌がはづれて、さぞかし力落としなるべし。されどもそれは当たり前のことなり。なぜといふに、その方、男ぶりは大ていなれども卑しき漁師なり。そのしみたれなるふりして、いかにも銭のなさそうな風俗。恵比寿様、男ぶりはともあれ、七福神のお仲間にて大金持ちなり。さるにより、乙姫君にも貧乏人より金持ちが良いとのお好みゆへ、さてこそ、その方、小便せられたり。しかし、ただも帰されまいとの事にて、この玉手箱をその方へ下されたり。何一つ不足なき龍宮の姫君でさへ、今は男ぶりの良いより金持ちの方がとのたまふ世の中。とかく金を持つ者でなければ、おちは取れぬから、貴様も金を貯める算段をするがよい。この玉手箱には金持ちになるものが入れてあるから、早く持って帰らしゃれ。これはご大儀でござった。」と、ついと立って入りければ、後に浦島独り、「面白くもない。とんだ目にあった。」と、不承不承にかの箱を抱へて立帰る。これは伊勢の太々講に行きしごとく、始めのほどはよってかかってもてはやし、中々下にも置かぬやうに機嫌取り馳走すれども、はや、だいだいうちて帰りには、誰もかまはず、やうやう御師の手代が玄関まで送り出でて、「はいさやうならば。」と言ったきり、つばきをしかける者もなし。浦島もそのごとく、来た時と違ひ、帰りにはすごすごと亀の背中へ乗るにも、こっちから追従軽薄して、ほうほうの体（てい）にて、やうやう故郷へ帰りける。

「全体、貴様の押しの強いといふもの。おいらでさへ、お気には入るまいと差し控えてゐるものを。」

「何とでも仰りませ。わたくし、これが災難でござります。」

（四丁裏）（五丁表）

浦島は龍宮よりすごすごと立帰り、「さてもとんだ目にあひたり。」と、心塞ぎてゐたるが、まだも頼みは貰ひ帰りし玉手箱とやら。「此内には金持ちになるものを入れおきしと、海老親父の言ひたるが、これも定めてろくなものにてはあるまじ。狐に化かされしやうな目にあひたれば、馬の糞でも入れてはないか。」と蓋を取れば、潮騒河豚が一つありしゆへ、さてこそ、こんなことであらうと思ふたと、そのまま河豚を放り出だせば、不思議や、この河豚、たちまちお多福の女となりたるをよくよく見れば、龍宮にて我にしなだれかかりしお多福なり。浦島を見て、にっこりと笑ひながら言ふやう、「私は乙姫様の代はり。お前と夫婦になりたい。」と、ひたひたと寄り添ふにぞ、浦島、此ほ

どは久しく女の匂ひもかがず、つひにこの河豚とその夜の添臥。もてなしの面白さに、浦島、心浮かれて次第に睦まじく、この河豚、顔容貌は見にくけれども、心ざし優しく貞節者にて、夫大事と敬ひ、女の手わざにかしこく、糸取り、機織り、縫い針仕事、夜の目も寝ずに稼ぎ、世帯を倹約しければ、浦島だんだん金が出来て、少しのうちに人に金を貸すやうに、次第に増へて安楽の身となりける。これみな女房の働きより起こりしなれば、玉手箱に入れて龍宮より帰りし河豚こそ金になるものと、海老の言ひたるが今思ひ当たり、浦島も心の内に今までその身にあたはぬ欲心を恥ぢて、心を改め、身の分限を守りけるにぞ、いよいよ富貴繁盛の身の上となりける。兎角、人はその身に過ぎたることを願ふは強欲にて、その心濁れるなり。心濁ると澄めるとは雲泥の違ひにて、河豚といふも、濁る時は鰒毒とてその毒あり。又、澄める時は福徳となり幸ひとなる。浦島、今は心清く澄みたるゆへ、□□□の河豚毒、はや福徳となりて、さてこそ幸ひ来たりけるなり。

「ヲヤヲヤ、河豚がおかみ様になるのかへ。浦島さんは鉄炮見世へ行かずとも、内に鉄炮が出来たから丁度良い。」

（五丁裏）

十返舎一九著

浦島は女房を持ちてより、めきめきと身上を仕出し、今は漁師をやめて家倉を立派に建て、田畑あまた買ひ求め、女男を使ひ、寛闊の暮らし。この節、恵比寿様、龍宮より帰り給ひ、以前のことの言ひ訳に、浦島の方へ訪ね来たり給ひ、以前の代はりとて福徳を授け給ふゆへ、いよいよ浦島は金銀山のごとく次第に増へて、万福長者となり、その上、九千歳の長生きし子孫繁盛しけるとぞ。めでたしめでたし。

「心だに正しき時は美目かたち醜きとても於多福の神」

当春御とし玉ものにかやうの小冊、いろいろ出板仕候間、御求め下さるべく候。板元　山平

美龍仙女香　京橋南一丁目　四つ角坂本製　取次

黒油美玄香

五湖亭貞景　画

（裏表紙）

不破伴左衛門　附たり鞘当の大小霰は互に見かへる出口の柳茶

名古屋山三　誂染遠山鹿子　二編　三編　歌川国貞　画

並に　買論を通小紋は比翼に重し編笠の葱摺

去寅春御覧にいれ候初編は、揚屋の場より清水の半にしてをはり、当卯春は清水の結びより山上の閻魔堂、名古屋山三館まで二編三篇に著し、おしつづけて売出し申候。

二本駄右ヱ門　人形筆五色糸蔵　二編同人画
有馬阿藤

初編は六ヶ年以前売出し候ところ、筋□□草稿取り失ひ、これからどうする狂言やら私にもわかり不申、今度あらたに筋をまうけ、御覧にいれ申候。前後の首尾のそろはぬところも、却て御一興に相なるべくや。

右両種とも相かはらず御求のほど

作者　柳亭種彦百拝

東都　よし町　おやぢ橋角　山本屋平吉梓

川岸　絵ざうし問丸

謝辞

資料掲載を許諾した舞鶴市へ謝意をあらわす。

名古屋大学名誉教授の塩村耕氏へ謝意をあらわす。

本研究はJSPS科研費JP 24K03643（日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究（C）「日本精神史の指標としての浦島伝説の解明」研究代表者　畑恵里子）の助成を受けたものである。また、二〇二五年度立命館大学アート・リサーチセンター文部科学省国際共同利用・共同研究拠点「日本文化資源デジタル・アーカイブ国際共同研究拠点」国際共同研究〔研究設備・資源活用型〕採択課題（研究代表者　畑恵里子）の成果の一部である。